芸術研究報 37 抜刷

Bulletin of Faculty of Art and Design, University of Tsukuba

アーサー・ダウ（Arthur Wesley Dow）の滞日日記

―日光山内の観光―

岡崎昭夫

2016

筑波大学芸術系研究報告 第69輯
2017年2月20日
筑波大学芸術系

アーサー・ダウ（Arthur Wesley Dow）の滞日日記
―日光山内の観光―

岡崎 昭夫

1. はじめに

本稿は、１年間の西回りでの世界一周旅行のため、日露戦争の前年の1903（明治36）年９月に太平洋を渡り、10月上旬に訪日したアメリカの美術教育者で、画家・版画家・写真家としても知られるアーサー・ウェズリー・ダウ（Arthur Wesley Dow、1857～1922年）の訪日に関する一連の研究の一つである。

2014年６月から世田谷美術館において開催された「ボストン美術館　華麗なるジャポニスム展」において、1900年前後のダウの版画（多色刷り木版）１点と写真（サイアノタプの青写真）３点が展示され、以下のように彼の業績が評価されている。

「ダウはパリのアカデミー･ジュリアンに学ぶが帰国後、ボストン美術館でアーネスト･フェノロサと出会ったことをきっかけに日本美術に深く関心を抱き、浮世絵を収集して模写まで試みている。よってダウの版画作品には明らかな日本美術の影響が認められ、《イプスウィッチの眺め》（cat. no.118）でも柱絵を連想させる縦長の判型に、鮮やかな色彩と線を強調した構成的な画面づくりを行っている。版画制作のために写真を撮ることもあったダウだが、彼の好んだ浮世絵の深い藍色を再現するかのような、一連のサイアノタイプによる写真作品を残した。画面の大部分に沼地を据えたことで余白を強調し、遠景に望む対岸を濃色の帯として捉え水平線を強調した作品は（ca.nos.119-121）、より抽象的な色面構成による風景描写へと向かったその版画作品にも通じている。また教育者として多くの表現者にジャポニスム的精神や手法を伝えたダウが強調した、トーンの濃淡に気を配った階調表現にも活かされたと考えて良いだろう。」[1]

こうした「ジャポニスム的精神や手法」の観点からのダウへの評価は、アメリカ近代美術史におけるモダニズムの画家・写真家としてダウを位置づける最近の研究[2]においても提示されている。

第１報[3]では、ダウの訪日時の日記[4]によって関東を主にした東日本での日程（10月７日～11月27日）の概要を示し、また当時の京都や大阪の新聞報道記事によって京都を主にした西日本の日程（11月28日～12月27日）を跡づけた。

第２報[5]では、1903（明治36）年11月28日～12月４日までのダウの京都における動静に関する新聞報道記事（12月２日～６日）の内容をダウの訪日時の日記と対照して検討し、第３報[6]では、1903（明治36）年12月５日～12月23日までのダウの京都における動静に関する新聞報道記事（12月６日～22日）の内容に基づいて、ダウの京都滞在中の旺盛な調査研究の活動を取り上げ、市民・学生への講演活動の内容を考察した。

第４報[7]では、上述のダウの日記に基づいて、1903年９月19日（土）のサンフランシスコ出港から10月７日（水）横浜港への入港までを対象として、この旅行に同行したダウの弟（Dana F. Dow）の旅行日記[8]や、1899（明治32）年９月29日にサンフランシスコを出港し10月18日に横浜港に入港した日本人記者（「長崎新報」）の西回りの世界一周の日誌[9]も参照し、ハワイを中継点とする明治末期の北太平洋航路の実情を明示した。

第５報[10]では、10月７日（水）から10月９日（金）までのダウの横浜滞在時の日記の内容を検討した結果、ダウは関東を眺望できる南北の三カ所のスポット、すなわち国内外の外国人によく知られていた「元町百段」上にある浅間神社の茶店、日本人が横浜の景色を見物に行った伊勢山皇大神宮、そして高島山の高島邸の全てに足を運んでいたことが分かった。いずれのスポットも約30m前後の標高であり、木造家屋が大部分の当時としては視界が遮られることなく四方を見渡すことが可能であり、そのことに明治末期の横浜という都市に最初に降り立った外国人観光の実情を見出せた。

第６報に当たる本稿では、日光でのダウの日記の記述内容を検討し、特に日光山内（日光東照宮、日光山輪王寺、日光二荒山神社、家光廟大猷院）の観光において何に関心を寄せていたのかを彼のモダニストとしての視点から考察してみたい。

2. 日光滞在

（1）日光観光の日程

1903年10月７日（水）早朝ダウ一行（ダウ、ダウの妻、ダウの弟、他２名）は横浜に上陸したが、横浜滞在の３日間は主にグランドホテルに滞在して、市内の観光に当てられた。日光に向けて出発した10月10日（土）から東京に向けて日光を離れた10月19日（月）までのダウの日記（論文末**表1の原文参照**）によれば、その日程は、①横浜から日光へ（10月10日）、②日光山内の参観（10月11日午前、17日午前、18日午前）、③裏見滝観光（10月12日午後、13日午後）、④滝尾神社参拝（10月13日午前）、⑤中禅寺湖遊覧（10月15日）、⑥写真撮影や買い物とスケッチ（10月14日、16日、17日）となっている。

本稿では、①横浜から日光へ（10月10日）と②日光山内の参観（10月11日午後、17日午前、18日午前）を日光に関する明治時代の各種の文献や現代の観光案内を通して、ダウが日光で何を見出したのかを考察してみる。

以下では、ダウの訪日時の日記からの引用は「AWD, 1903」と表記し、その後に数字で月と日を示す。同じく、この旅行に同行したダウの弟ダナ・ダウ（Dana F. Dow）の旅行日記からの引用は「DFD, 1903」と表記し、その後に数字で月と日を示す。なお引用文中の（ ）は原文にあるもの、［ ］は筆者の注記である。

（2）横浜から日光へ

ダウの一行は、10月10日（土）に横浜のグランドホテルから日光に向かう。「私たちは、午前９時40分の列車で、

３回乗り換えて、日光に行く。それは９時間の乗車で、その日は曇りで暗かったが、雨ではなかった。」（AWD, 1903.10.10）

同年の1903年発行の横浜に関するガイドブックには横浜駅発汽車時間表が掲載されており、上り線には確かに午前９時40分発の新橋行の運行が示されている。この列車は、新橋駅の一つ手前の品川駅から現在の山手線や東北本線に乗り換えて、北関東の各地（川越、八王子、小山、桐生、水戸、前橋、長野）に接続する便利のよい列車であり、日光行きにも接続していた[11]。横浜駅から新橋駅までは1894（明治27）年の時点[12]で午前９時50分発の直通列車が品川駅に10時23分に到着しているので、ダウ一行の場合は午前９時40分発で10時13分頃に品川に到着しているとみられる。

1903（明治36）年７月改正の鉄道の時刻表[13]によると、新橋駅発で品川・新宿・池袋を通過して赤羽駅に到着する直通列車が出ていた。当時は横浜駅から上野発の東北行きに接続するには、新橋駅と上野駅の間が未開通であったため、遠回りでも赤羽駅に向かう必要があった。ダウ一行が品川駅午前10時34分の赤羽行きの列車に乗ったとすると、午後12時11分に赤羽駅に到着する。上野駅発で正午前後に赤羽駅を通過する上野青森間の列車としては、12時37分到着、42分発の白河行がある。その前後は11時発と午後３時発であることを考慮すると、この列車に乗車したとして、宇都宮には午後４時24分に到着し、そこから日光行きの午後４時50分発の列車に乗れば午後６時33分に日光駅に到着する。ダウの記述と同じく、新橋駅で赤羽行きに乗り換え、赤羽駅から宇都宮行きに乗り換え、宇都宮駅から日光にと３回乗り換えたとすれば、約９時間で日光に到着したはずである。

こうした列車による移動で、車窓からの日本風景をダウは以下のように描写している。「風景はいくらかうっとうしく、ただ水田、樹木のつらなり、麦わらの屋根であった。土地は大いに耕され、野菜や穀物の畑が鮮やかな色の斑点をなしていた。それぞれの駅では、男が低い声で“おべんとう”という叫びにそって近づいてくる。彼がもっているのは、お菓子、果物、弁当箱、そして飲み物であった。午後には私たちは遠い山脈を見始めた。その最も目立つ山は、均整のとれた様子（色調）の筑波山であった。」（AWD, 1903.10.10）

時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」[14]で品川駅から赤羽駅まで1900年代の時期の地図をたどって見ると、都内の各駅付近を除けば田を示す地図記号ばかりであり、畑を示す空白も多い。現在でも列車で赤羽を過ぎると沿線から右手に筑波山が小山駅まで見え続けて宇都宮駅に到着するが、それはダウの時代と変わらない風景である。

宇都宮駅でダウ一行は最後の３回目の列車の乗り換えをして目的地に日光に向かう。当時の宇都宮は「栃木県庁の在るところにして奥羽街道の要衝に当たり、県下第一の都市」で、「戸数七千余、人口二万七千余、市中には電灯を点し、商業繁盛の諸種の市場、馬市場等大いに賑」わっており、「日光線の分岐する所なれば、日光参詣者こゝにて乗換」とされていた[15]。「宇都宮で私たちは最後の乗り換えをして、日光まで20マイル［1.6km×20＝32km］ばかりの杉の大きな並木道が始まる。それは暗いが、私たちは黒ずんだ木々の長く暗い道筋を見ることができる。道の途中で私たちが見た日本の人々はほとんど農民階級のようだが粗野ではない。皆急いではいないが忙しそうに見えた。汽車はゆっくりと動き、各駅では長く停車する。」（AWD, 1903.10.10）

日光線は1890（明治23）年８月に日光まで全線開通したが、ダウ一行が乗車した1903（明治36）年には、宇都宮と日光間に鶴田、鹿沼、文挟、そして今市の各駅が設置されていた。この沿線は、鹿沼駅北部の現在の日光市小倉から始まる「日光例幣使街道」（現国道121号）の杉並木を左手すぐ近くに見て（日光市山口から始まる現国道119号の「日光街道」の杉並木は右手はるか遠くで見えないほどの距離）、今市駅まで北上する。その駅の手前で「日光例幣使街道」と線路は交差して、「日光例幣使街道」は「日光街道」の杉並木に吸収され、今市駅からの日光線はその「日光街道」の杉並木を右手に見て日光駅のすぐ手前まで並走し再び交差して日光駅に至る[16]。

当時の外国人旅行者が旅行中に携帯していたチェンバレンとメーソンによる『日本旅行案内』（第７版1903年）によると、日光に向かう「横浜からの旅行者は前もって品川と赤羽で列車を乗り換える」ことが指示され、宇都宮駅からその日光線の「路線は、賑やかな鹿沼の街の例幣使街道を活用するため、北方へと分岐する。古い杉が並ぶその街道に沿って運行し、もう一方のもっと堂々とした並木道（日光街道）は、長さが20マイルで宇都宮から日光まで続くが、視界には入らない。それが今市に着くまで続き、そこで二つの街道は結合する」[17]。ダウが現在の日光線の所要時間40分の倍の時間をかけて、動く車窓や停車中の車窓から見たのは、確かに夕刻のこの杉並木の「木々の長く暗い道筋」や端正な「農民」の姿であった。

横浜を出てからようやく９時間後、ダウ一行は目的地の日光に到着する。当時の日光は、「栃木県下下野国上都賀郡日光町字磐戸町にあり、この地海面を抜く事千七百四十五呎［フィート約30.5cm×1745＝53222.5cm］、全線第一の高地」であり、「当地は我国唯一の遊覧場にて、廟社の壮麗なる、撒水の奇絶なる、他に比類を見ず」[18]とされ、外国人のリゾート地としての役割も果たしていた。1902（明治35）年では「戸数千八百五十一、人口八千九百六十一」で18の町から構成されていた[19]。

ダウ一行は日光駅から宿泊予定のホテルの従業員により、人力車で「日光ホテル」に向かうため、日光の商店街を進む。「鉢石という最後の駅で、私たちは、今市で

我々と会った日光ホテルの従業員によって、人力車に乗せられた。その後、私たちは、忘れられそうもない奇妙な体験をした。二人の男がその人力車を商店街（横浜よりも少ない店数で、色々の人々）の長い道の上へ押し上げて、その後、私たちは他の人と出会う。それぞれの人力車に3人が。そして、私たちは、杉の並木道に入ったが、その幹は高く上まで暗闇のなかにそびえ立っていた。その車夫たちは過度に足取りをドスンとさせ、私たちを押して上げ、先頭の車夫は上下のガタガタの揺れに警告の叫び声を上げた。彼らは我々を曲がり角で横道にそって回した。そこは物作りの音がしていたが、あちこちについた電灯だけが闇を神秘的にしていた。」（AWD, 1903.10.10）

ダウが記した「鉢石という最後の駅」はいうまでもなく現在では誤りであるが、チェンバレンとメーソンによる『日本旅行案内』（1903）には、日光線の駅のリストに「NIKKO（Hachiishi）」[20]と記載されていることからすると、勘違いのミスとは言えない。日光街道の最後の宿場は「鉢石宿」で、現在でも日光駅から日光東照宮に至る市街は、江戸時代の名残で上鉢石（はついし）町と下鉢石（はついし）町と呼ばれている。もともとこの「日光の市街は、日光街道から市街にはいり神橋にいたるまでゆるい勾配をのぼるかたちをとって」いて、「江戸時代にはすべて石段となっていた」が、1983（明治16）年に三島通庸によって「石段を撤去して一般の道路に」[21]改修された。しかし悪路であろうことは想像でき、そのため市街を走る人力車の乗り心地の悪さ、段差での持ち上げ、特有の警告の発声に、驚いたのであろうと思われる。**図1**は、このゆるい勾配を登り切ったところの高台にある「観音寺」から奥に日光駅に向かう日光鉢石の市街を撮影している。手前左を下ると大谷川にかかる「神橋」に至り、対岸が日光山内である。

ダウのこの日の日記は以下のような記述で終わっている。「私たちは、丘を下り、急流にかかる橋を通った。そして、より大きな木々や横道があり、最後に、照らされたホテルによって明るくなった前庭の中に大急ぎの仰々しい速度で入った。私たちは快適な部屋を得た。その料金は一人部屋で5円、あるいは二人部屋で9円50銭である。」（AWD, 1903.10.10）

ダウ一行が人力車で通過した橋は、前年の1902年9月の台風で大谷川に架かる日光のシンボル「神橋」と仮橋が流されていたので、仮設の橋であろうと思われる。そして、ダウ一行の投宿したところは「日光ホテル」で、1900年に発行された地図（**図2**）では、左半分の中心、「大猷院廟」（IEMITSUKO）のすぐ下に位置し、『日本旅行案内』の494頁と495頁の間に挿入された**図3**では、中心からやや左の「IEMITSU TEMPLE」の下の「IRIMACHI」（入町）に「NIKKO HOTEL」が示されている。このホテルのあった場所は、**図4**の現在の日光市街の地図では、「本町」あたりであろう。

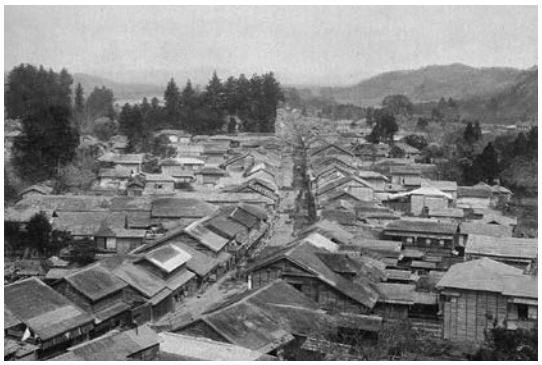

図1.「日光鉢石全景（2）」長崎大学付属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータベース撮影者玉村幸三郎　年代不明　目録番号476部分　掲載許可

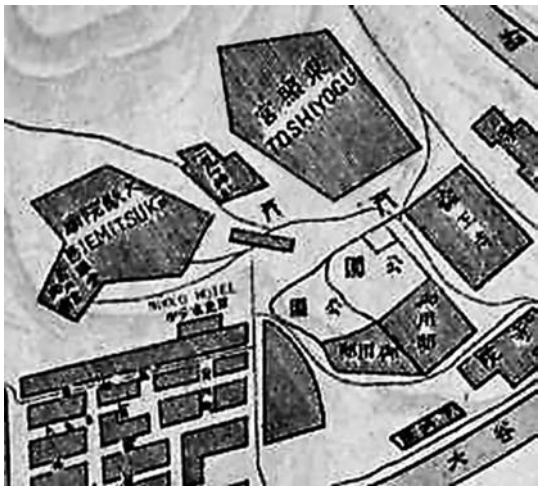

図2.「日光町之図」発行兼印刷　金魁堂　鬼平金四郎　1900年4月31日　部分

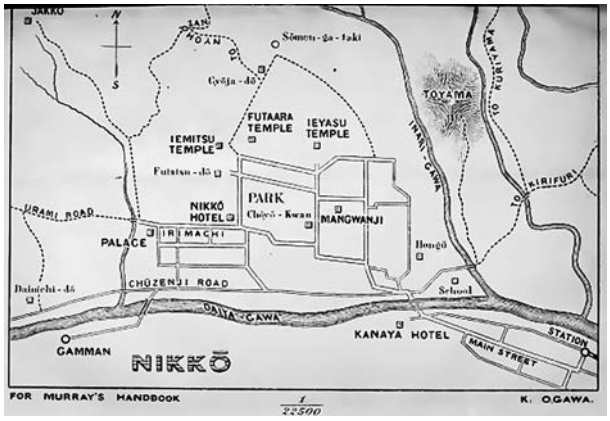

図3. B. H. Chamberlain and W. B. Mason, *A Handbook for Travellers in Japan*, 7th ed., London: J. Murray, Yokohama, Kelly & Walsh, 1903

図4.「日光」グーグルマップ

このホテルは、1989（明治22）年に日光の四軒町（現本町）に客室20室余りで開業し、隣にその２年後に開業した外国人向けの「新井ホテル」に1897（明治30）年に買収され、両ホテルは1898（明治31）年に統合して「日光ホテル」の名で営業していた。このホテルは、両図の右下に位置して現在も営業している「日光金谷ホテル」（1873年６月開業）とともに日光における外国人用の代表的なホテルとして知られていたが、1926（大正15）年１月４日の火災で焼失した[22]。

開業当時の新聞記事や見学体験に基づいて、このホテルの建築の壮観さや「門前のランプが煌々と輝いていた姿」から、その華やかさがうかがえる[23]。**図5**に見られるようなホテルの洋風の建築や、**図6**の『日本旅行案内』に掲載された広告の中にある「清潔で風通しのよい部屋」などの文面を見ると、ダウ一行が東照宮に隣接して便利なこのホテルを選んだ理由もうなずける。宿泊料については、現在の日光金谷ホテルの料金に参考にすると、当時の１円は現在の4000～5000円位に相当するだろう。

以上のようなダウによるこの横浜から日光への記述は、同行したダウの弟の日記によっても、到着時間に30分ほどの差（時刻表では午後８時31分着の宇都宮からの最終列車がある）はあるが、部分的に裏付けられる。「トランクを駅に送るため多くのトラブルの後、午前９時40分の列車で日光へ。果てしない水田のパノラマの一日中の乗車」の後に「午後７時に日光に到着した。その時は大変暗く、私たちは、人力車に乗り込み、長い村落を抜けてガタガタと揺れて丘を登り、次に橋を渡り、古い杉の街道を上がったが、その道をいつまでも覚えているだろう。」（DFD, 1903.10.10）ダウと同じように日光駅から日光ホテルまでの人力車のガタガタ道が強い印象を与えていたことがうかがわれる。

（3）日光山内の参観

ダウは翌日の早朝にこのホテルから周囲を眺望して、以下のように記述している。「この日の朝に部屋から外を見ると、明るい緑の山々は大変険しく、川（大谷川）を横切って、見えた。そこには一つの村があり、右の角度に曲がる道がある。小川が急流で下り、道沿いに流れ、庭園の中をめぐり、車輪で流れを変えている。荒野はポンタヴェンにとても似ている。ほとんど全ての家には庭があり、花の庭ではなく、樹木や灌木の小さな空間で、一つか二つの角灯、石、池、あるいはその模造。一年前の台風はすさまじい被害を与えた。有名な赤い橋を破壊し、“百仏”と呼ばれる古い彫像の40体以上を押し流した。それは、数マイルに渡る両岸の土手を変えてしまった。」（AWD, 1903.10.11）

1893（明治26）年夏にオーストリア皇太子が宿泊したこともある[24]このホテルは、1900（明治33）年には日光の「旅館中最大なるものとして、及び壮麗完備なるものとして」知られ、「後ろに樹木茂れる山を負ひ」、「洋風の高舘巍々として聳［そび］へ、外観の美よく地の名勝にたるに適す」とされ、「樓上樓下の装飾は完備清潔いたらぬ隈なく、四近の眺望亦た極めて可なり」として日本の名勝の一つに挙げられて、**図7**のような写真が掲載されている[25]。

ダウがこのホテルから見た山は、ホテルの南側に流れる大谷川の向こうの大きな鳴虫山（標高1103m）であろう。この川沿い手前のホテルから右手には1899（明治32）年造営の「日光田母沢御用邸」の庭園があった。そうした周囲の風景は、ダウがフランス留学中に見たであろう、

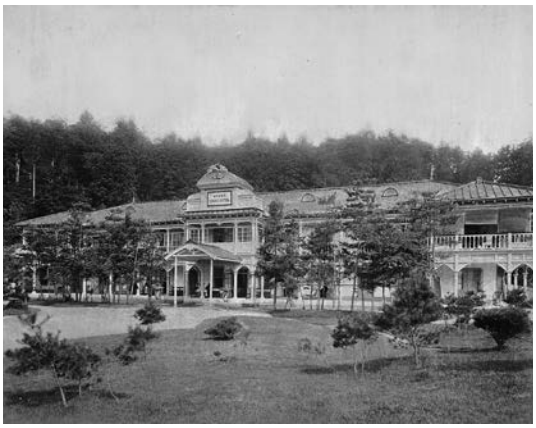

図5.「日光ホテル（1）」長崎大学付属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータベース　撮影者不詳　年代不明　目録番号5420部分　掲載許可

34 *Advertisements.*

CABLE ADDRESS "ARAI" NIKKO.　TELEPHONE No. 3.

NIKKO HOTEL

The most pleasantly situated and most comfortable Hotel in Nikko. Only twenty minutes from the station & nearest to the Celebrated Temples.

Absolutely First Class Accommodation.

Strict attention is paid to the Comfort and Convenience of Visitors

EXCELLENT CUISINE

GRAND VIEW　CLEAN & AIRY ROOMS

CHARGES MODERATE

Special arrangements for a long stay.

Visitors Met at the Station on the Arrival of Every Train.

A. ARAI, Proprietor.

図6. B. H. Chamberlain and W. B. Mason, *A Handbook for Travellers in Japan*, 7th ed., London: J. Murray, Yokohama, Kelly & Walsh, 1903の巻末 Advertisements, p.34

図7.「（下野）日光ホテル」瀬川光一編『日本之名勝』史伝編纂所 1901年　人の部　21頁　部分

ゴーギャンや多くの画家が暮らしたフランスの画家の集った町、ポンタヴェン（Pont Aven）を想起させた。

この御用邸に隣接するのは「含満ヶ淵」で、「日光入町の南にあり、大谷川の両岸奇石怪石磊々として、虎の如く、龍の如く、水其の間に渦潭を為し、北岸上に不動ノ石像を安置す、左岸には数百体の石佛あり、遠く望めば宛然兵士の隊伍のをなせる如し、渓上に護摩壇あり、霊庇閣と伝ふ」[26]と当時の観光案内に記されている。

現在の観光案内によると「ストーンパーク」という公園の中央の道の奥に「慈雲寺と化地蔵」があり、「その当たりの小渓が憾［含］満ガ淵で」、慈雲寺本堂から「少し上流に行くと、右手に霊庇閣があり」、「対岸の不動明王に向かって護摩供養が行われ」、ここから「奥には、約70体の地蔵群が一列に並んで」いて、これらの地蔵群が別名「百地蔵」とか「化地蔵」（数が多いので何度数えてもその数が合わない）とも言われている[27]。

ダウの言う台風とは前年の1902年９月28日午前に日光を通過した台風のことであり、『日光市史』によると「含満ヶ淵の通称化地蔵と呼ばれる数十体の石仏も多くは流失し」、さらに「神橋の流失をはじめ、社寺の建物の被害」も多かった[28]。

ダウはこの台風による洪水で「含満ヶ淵」を含む両岸の被害の甚大さを目撃していたのである。前述のチェンバレンとメーソンによる『日本旅行案内』（1903）にも神橋が「1902年の洪水で流失したこと」や「含満ヶ淵」の多くのものが「恐ろしい洪水で持ち去られた」ことが記述されている[29]。

ダウ一行はこの日に日光山内の二社一寺を参観しているが、そこは**図8**の地図に示すように、宿泊していた「日光ホテル」に隣接していた。「私たちは寺社を訪れた。拝観料は１名80銭（３寺）で、５人へのガイドが１円25銭、美術館、“三仏”、神聖な舞への少額の入場料は別にして。その寺社は荒々しい華麗や豪華さにおいて強烈であるが、退廃的な美術だ。私は興味を持ち、唖然ともしたが、素晴らしくはなかった。大きな樹木のある美しい並木道や、街へとつながる石段の明るさが、その雄大さや荘重さにおいて、寺社よりも印象的であった。」（AWD, 1903.10.11）

1902（明治35）年発行の日光のガイドブックによると、「日光拝観料は普通拝観料金八拾銭、軍人四拾銭、日光町民親戚四拾銭学校生徒貳拾銭（但し修学旅行に限る）」[30]であったので、ダウ一行が拝観した翌年も同額であった。現在の拝観料はダウの言う「３寺」（現在の二社一寺）で2300円なので、当時は少し高めの金額であったかも知れない。

ダウの日記の当日の記述は、きわめて曖昧でどこを見たのかが書かれていない。「美術館」や「“三仏”」の拝観が別料金であることを記していることから、「美術館」

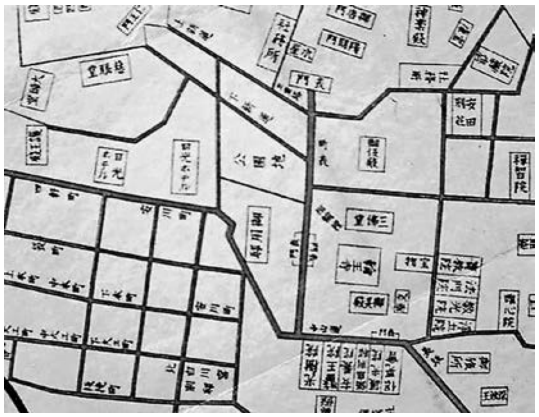

図8.「日光市街近傍図」橋部儀助　中澤逸平　1900年4月20日部分

図9.「日光山真図」秦虎四郎『日光山名所旧跡案内』盛弘堂　1901年所収

は輪王寺（図２では「満願寺」で、明治新政府の「神仏分離令」により1869～1883年はこの名称）の「輪王寺宝物所」であろう。それは、「逍遙園」内の東にある「御霊殿」（明治29年造営）の「後ろに出向ふなる石造り」の建物で、「三代将軍徳川家光公を理むる大猷院廟の御宝物を茲に陳列して参拝者に拝観を許す」所であって、**図8**の「三佛堂」右下の「宝物」（現在の「實教院」の道を隔てて向かい）の場所である。「“三仏”」は輪王寺の「三佛堂」を指し、「輪王寺宝物所」の「西方に巍々として峙だつ」「当山第一の伽藍にして一山の本堂」であり、「間口十八間奥行十四間高さ二十三間銅瓦総朱塗堂内に阿弥陀如来千手観音馬頭観音の大座像を安置し四方廊下を巡らし堂後に五大明王の像を安置」していた[31]。

ダウが退廃的と評価しているのは、寺に複数形が使われているので、二社一寺の全体に関する過剰な装飾に関しての言及であろうと思われる。ダウは、絵画のみならず工芸や写真、そして美術教育においてモダニズムを志向していたので、画面構成の単純化や抽象化を重視する観点からは、日光山内の建築群への装飾的付加は「華麗や豪華さにおいて強烈」だとしても、それらの建築群を繋ぐ**図9**の中央に見られる「樹木のある美しい並木道」の簡潔さが気に入っていたと思われる。

ダウの「街へとつながる石段」という記述からすると、表「参道の両側の杉並木の間の幅が広い階段を登ると花崗岩の鳥居に来る」[32]ので、この鳥居から表参道（**図10**）を見下ろしたのかも知れない。1893（明治26）年夏に来日したオーストリア皇太子も、日光山内における「深い静寂、荘重な静謐が、おごそかな樹幹に満ちて」、「ここの大地をおおう巨杉がこれほど壮大だとは夢にも

思わず、すっかり圧倒されてしまった」[33]と記している。

そうした印象評価は、ダウと同行していた造園家の弟のダナ・ダウも当日の日記にも記されている。「日曜日の午前、晴れた日。朝食の後に、寺社を参観する。鮮やかな色彩や金箔の装飾と彫り物の表示は、十分に人を当惑させる。巨大な杉は何物にも似ていない。その雄大さや樹齢に感銘を受け感心した。」（DFD, 1903.10.11）

さらにダナ・ダウの当日の日記には、兄のダウの日記にはにはない山内参観の様子が記されている。彼によれば、「全ての寺社で、私たちは靴を脱ぎ、帽子をとり、外套（オーバー）を脱がざるをえなかった。」（DFD, 1903.10.11）と述べて、「訪れた場所（輪王寺　本坊　三仏堂）（日光東照宮　家康）（輪王寺、大猷院　家光）（百地蔵？　含満ケ淵）」（DFD, 1903.10.11）とリストに挙げている。

この記述からすると、ダウ一行はこの日に日光山内の輪王寺と東照宮と大猷院の拝殿・本殿を「靴を脱ぎ、帽子をとり、外套（オーバー）を脱」いで拝観し、その間にある日光二荒山神社は前を通りすぎたのかも知れない。そして特に「三仏堂の寺院では、きれいで小さな庭やいくつかの小さな社があり、興味を起こさせた。鐘塔の鐘がその寺社にあり、日の出から日の入りまで、１時間ごとに、打ち鳴らされる。その音が鳴り響いて、浸透し、たいへん遠くまで聞こえる。」（DFD, 1903.10.11）ことがダナ・ダウの印象に残っていた。

「小さな庭」とは「逍遙園」（**図11**）で、「江戸時代に造られた代表的な日本庭園で、池が中心となって、その周囲を歩きながら楽しめる池泉回遊式と呼ばれる」庭園であり、その「東方向に皇室および歴代門跡の霊位を安置する御霊殿の建物が見える」。

「鐘塔の鐘」とは、「三仏堂の左にある鐘楼の鐘」で、「山内に時を知らせるためのもの」であり、「大みそかの除夜の鐘としても利用されている。」この鐘楼（**図12**）は「１つ角を３本の柱で支える、合計12本の柱を持つ建物」[34]で、明治時代の日光観光案内にも「三佛堂の左にあり、鐘口直径四尺天保二年の改鋳なり覆屋は欅の素木にして一隅に三柱を建つ」[35]と紹介されている。

ダウ一行の日光山内の拝観はこの日だけではなかった。「（私は午前中は寺院で過ごした。）」（AWD, 1903.10.17）という但し書きあるので、ダウは17日の午前中に雨にもかかわらず一人で再度日光山内を訪れているが、何をしたのか日記に記されていない。

しかし翌日（日光を離れる前日の18日）には、一行の皆と一緒に東照宮と大猷院を訪れている。「雲のない空で快晴。私たちは午前に寺社に行った。家康は最も重要だ。素晴らしいデザインの多くの品々がある。とりわけ、陽明門の柱、そして、唐門のちりばめられた細工。」（AWD, 1903.10.18）

図10.「日光東照宮参道（2）」長崎大学付属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータベース　撮影者小川一真　年代不明　目録番号383　掲載許可

図11.「輪王寺逍遙園（1）」長崎大学付属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータベース　撮影者不詳　年代不明　目録番号2699　掲載許可

図12.「輪王寺の鐘楼」長崎大学付属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータベース　撮影者A.ファサリ　年代不明　目録番号952　部分　掲載許可

図13.「日光東照宮陽明門（18）」長崎大学付属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータベース　撮影者不詳　年代不明　目録番号2123　掲載許可

ダウが注目したのは陽明門の円柱（**図13**）であり、「胡粉（貝殻をすりつぶしてつくった白色の顔料）を塗った12本の柱」は、左右に２本ずつ、奥行き３段に配置して門を支え、「グリ紋と呼ばれる渦巻き状の地紋が彫られ」ている。「門をくぐり終わる左側の柱」の「グリ紋の向

きがこの柱だけ異なって」いて、これは未完成部分を残すことで「魔除けの逆さ柱」となっている[36]。当時の鉄道の各駅案内にも陽明門は「俗に日暮の門と称し精巧壮麗筆紙の能く盡べきに非ず」とされ、その「柱十二本は皆槻［欅］の丸柱にして、中柱には木杢の二匹虎あり一本の柱は逆さ柱と称し、俗に魔除け柱なりと」[37]と指摘されている。渦巻きを２つ繋げたようなグリ紋は、「中国の漆工芸品のデザインに多く見られ」るもので「獣の顔を想起させ」、「これ自体にも魔除けの意味がある」[38]とされるが、ダウが目にとめたのは「その門を支える円柱が微細な幾何学的パターンで彫られ、白く塗られている」[39]ことであったと思われる。

そして「唐門の細工」（**図14**）とは「唐門の両側の柱」の「昇竜・降竜」で、これらは「紫檀と黒檀の色を行かした寄せ木細工で、竜の迫力ある表情など、細かく見ると見事なもの」[40]と評されている。ダウの訪れた当時から「此門の彫物は異朝の名木を寄せて刻みたる物にて細工の精密なる事俗眼の及ぶと處にあらず」[41]と評価されていた。

ダウは以下のように彩色にも興味を示している。「最もよい色彩は、家康の神社の君主の部屋の天井だ。一般的には、彩色された彫刻は私の興味をたいへん引き起こした。牡丹や他の花模様は多くが金地で、色彩と白の使用がたいへん効果的だ。特に唐門には白い人物の行列全体がある。」（AWD, 1903.10.18）

「家康の神社の君主の部屋」とは「拝殿」を示している。唐門を抜けて本社（手前から拝殿→石の間→本殿の順で奥へと）の拝殿の中央の「正面の間なる天井は折揚二重の格天井其内へ岩紺青にて丸龍の彩色其形皆各異なり」、「東の間を将軍御着座の間と称す天井は折揚造り真中に伽羅の木一枚にて葵の御紋を造」られ、さらに「西の間は御門主御着座の間」で「御天井の真中に天人の彫物あり」[42]とされている。拝殿から石の間を隔てて本殿（外陣→内陣→内内陣の三室）があり、「外陣の天井は格天井で、122の格子には鳳凰が描かれて」[43]いるそうだが、現在でも非公開の神聖な場所であることからすると、ダウの言及している天井とは拝殿中央の間の天井の丸龍の彩色である（**図15**）と判断できる。

またダウが見出した効果的な色彩は、牡丹やその他の花の「彩色された彫刻」であるが、東照宮の彫刻の中では「植物とりわけ花の彫刻が多く、牡丹・菊・梅・桜など百花繚乱」で「かなりの数の薔薇の彫刻もある」[44]。そして「東照宮の彫刻の中で、最も数の多いものが牡丹で」、「大きいものでは、陽明門左右の羽目の牡丹の浮彫で」、「小さいものでは、本社の桟唐戸の綿板に付けられた牡丹唐草の透彫で」ある。「拝殿・石の間・本殿を合わせると、桟唐戸が54枚」あり、「扉の片面に平均大小９個の彫刻。裏表の両面にあるから、これだけで合計

図14.「日光東照宮唐門（4）」長崎大学付属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータベース　撮影者不詳　年代不明　目録番号1390　掲載許可

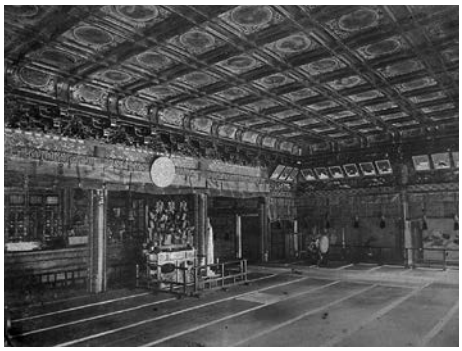

図15.「日光東照宮拝殿と石の間」長崎大学付属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータベース　撮影者玉村康三郎　年代不明　目録番号484　掲載許可

1000体」[45]となるようだ。チェンバレンとメーソンによる『日本旅行案内』（1903）にも拝殿の「折戸は金箔の浮き彫りの牡丹の唐草模様で豪華に装飾されている」[46]と解説されている。

浮き彫りや透かし彫りの牡丹に施された金地と極彩色が胡粉の白に映えるような色彩の効果をダウは見出し、さらに、唐門の人物群の彫刻における白色のみの効果も指摘している。これは唐門の「破風下の四方の平桁の上なるは尭帝及び七福神、七賢人、八仙人等」[47]であり、「東照宮の中で、人物彫刻のあるのは、陽明門と唐門だけ」[48]と言われている。

ダウは東照宮の次に、日光二荒山神社を過ぎて、輪王寺の家光廟の大猷院に参拝した記述を短く残している。「家光の寺院の中庭の灯籠はたいへん曲線的だ。それぞれの灯籠は、薄く緑で屋根が塗られている。」（AWD, 1903.10.18）

この大猷院は、「徳川三代将軍『家光公』の廟所（びょうしょ）（廟所＝墓所）で、境内には世界遺産に登録された22件の国宝、重要文化財が建ており、315基の灯籠（とうろう）も印象的」[49]とされている。明治時代の文献によると、諸家献上の灯籠の総数は「三百十一基」で、その内「唐銅六十四」、「石二百四十七」[50]となっていた。ここは、日光二荒山神社の左（東）側に位置しており、拝殿・本殿へは仁王門、二天門、夜叉門、唐門の順で入って行かなければならないが、「唐銅、石造等約三百余、二天門より夜叉門に至る間に配列」[51]されていることから、その献灯のほとんどが二天門の門内にあることになる。この「二天門から夜叉門を結ぶ鈎の手に曲がった参道には33対の唐銅製の灯籠が並んでいる」が、これらは「十万石

以上の大名から奉納されたもの」[52]である。さらに、夜叉「門内の広庭に徳川三家及諸大名よりの大燈十二基余り立並ぶ」が、「その内の朝鮮国より献備の灯籠二基相対して建て」られて、「其真中の石甃を渡れば」[53]唐門（**図16**）に至る。

なお夜叉門は別名「牡丹門」と言われていて、その由来は「前後の破風下に牡丹に唐獅子を刻めるを始め、天井に羽目に悉く牡丹唐草の彫刻」[54]があることから来ており、チェンバレンとメーソンによる『日本旅行案内』にも夜叉門の内側を「回ると、草・枝・花の装飾の美しい眺めを目の前で得る」[55]と述べており、ここでダウは日記には書かれていないが、牡丹の浮き彫り等を充分に堪能したに違いない。

ダウが注目したのは、石造りの灯籠よりも、唐銅製の灯籠であり、それらの多くの形態に認められる曲線による造形性であった。ダウによれば「家光の殿堂は仏教で、たいへん精巧に金と色彩で装飾されている。おおきな壁絵の獅子は、家康の殿堂のそれよりも、粗野で粗い。」（AWD, 1903.10.18）と述べている。

明治末期の観光案内書によると、「銷光漆の階段、朱金の勾欄、殿の中央に黄金の天蓋を懸く、鳳麟天女を鐫彫す、精美驚くべし、凡そ殿中のもの皆鍍金、煌燿として人を射る」[56]と評され、別の書でも、拝殿の「格天井には丸龍を画けり、奥の羽目板に画ける獅子は探幽の筆にして、正面の香燈、南側なる金の立花、及び燭台は徳川御三家及加州［加賀］家より献ずるもの」[57]とされている。

現在の案内書によると、ここの大猷院の建築は拝殿・相（あい）の間・本殿が連結したもので、非公開の本殿は国宝であり、「金閣殿」とも言われている。拝殿（**図17**）の天井は140の竜が画かれていて、「入り口の正面には、幕府の御用絵師だった狩野探幽と、弟の永真の唐獅子（壁絵）も見ることができる。」[58]天井の竜は「紺地に金」で、相の間の「格天井は鳳凰」、本殿の外観は「黒が基調の拝殿とは趣が異なり、唐戸や柱などそこかしこに金彩が施されている」[59]。

東照宮の家康の拝殿は、明治政府の分離令により仏式の装飾品が除かれたが、家光のそれは輪王寺に属したので各種の装飾品がそのままで、拝殿の内部は家康の拝殿よりも豪華に見えるはずであり、さらに本殿の外観の金彩にもダウは目を奪われたのだろう。またダウは家光の拝殿にある「壁絵の獅子」を家康の拝殿のそれと比較して評価している。家康の拝殿を３つに仕切るためにある「左右の襖戸、右は金泥地にして竹と麒麟の彩色、左は獅子と、之皆探幽の筆なり」[60]とされている。ダウが比較したのは左の襖戸に描かれた獅子であり、襖戸に描かれたものと比較してしまうと、壁に描かれたものが粗野で粗く感じてしまったのは当然かも知れない。

図16.「日光大猷院唐門」長崎大学付属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータベース　撮影者不詳　年代不明　目録番号1184　掲載許可

図17.「日光大猷院拝殿（2）」長崎大学付属図書館幕末・明治期日本古写真メタデータベース　撮影者不詳　年代不明　目録番号4457　掲載許可

3. モダニストの視点

日光山内の日光山輪王寺・日光東照宮・家光廟大猷院の参観をダウの日記から検討してみると、ダウが何に関心を寄せたのかが分かる。

歴史的背景や社会的実用性を離れ、形態や色彩の造形性に基づく近代的な美術の観点からは、建築の外観や内部の過剰な装飾についてダウはあまり関心がない。彼が注目したのは、巨大な建築群の壮大で華麗な姿よりは、ごく小さい浮き彫りや透かし彫りの牡丹であった。ダウは、それらに施された金地と極彩色が胡粉の白に映えるような色彩の効果を見出し、さらには、唐門の人物群の彫刻における白色のみの効果にも注目している。こうした「彩色された彫刻」とともに、拝殿の天井の岩群青の丸龍の異なる彩色に興味を示している。より抽象的な色面構成を風景画や風景写真において試みていたダウにとって、唐銅製の灯籠の曲線による造形的形態も印象深かったものと思われる。

こうした小さな工芸的ともいえる品々への関心は確かに見出せるが、それよりもはるかに強く彼の関心が示されているものがある。それは、建築群を繋ぐ日光山内にある巨木の杉並木の道筋である。ダウは美術制作や美術教育においてモダニズムを志向していたので、画面構成の単純化や抽象化を重視する観点からすると、彼のそうした関心はうなずける。

確かに、1878（明治11）年に来日したイザベラ・バードによれば、東照宮の「風格ある周囲の杉林」の大木は、「その美しさで社殿を囚われ人のように封じ込め、訪れる者にこれまで知らなかった形や色の美しさを認識させる」とし、「金はふんだんに用いられ」、「広範囲に惜しみなく使われている黒、鈍い赤、白は極めて独創的」で、

「青銅の雷文ひとつをとってみて仔細な観察」に値すると述べている[61]。このような記述を四半世紀後に来日したダウに適用するならば、ダウも杉林の巨木の存在そのものに封印された社殿の中にモダニストの視点から色や形の独創的な造形の一端を見出していたと言える。

4. 今後の課題

本稿では、ダウの日光観光の日程の中で日光山内の参観（10月11日午前、17日午前、18日午前）のみを考察した。裏見滝観光（10月12日午後、13日午後）、滝尾神社参拝（10月13日午前）、中禅寺湖遊覧（10月15日）、写真撮影や買い物とスケッチ（10月14日、16日、17日）を考察することは、紙面の限定からできなかったので、今後の課題としたい。

特に10月12日に裏見ノ滝へ一緒に行ったウッドマン氏（Wooodman, Edmund Ratcliffe ?-1909）はこれからのダウの６週間にわたる東京滞在に寄与した重要な人物である。彼は米国聖公教会（P. E. Church: Protestant Episcopal Church）の伝道師で、その教会が日本で設置した立教学院の敷地の住居（東京築地40番地）に住んでいたが、そこを東京滞在のための宿舎としてダウに提供した。ダウの10月20日付けの日記には「私たちは40番地のウッドマン師宅に移動する」とあり、それ以後一ヶ月の滞在が示唆されている。

また、日光滞在の10月13日午前には「この日の午前は、ミニーネとダナと私は、上の方の滝尾神社の小さな神殿まで行った」が、そこでダウが写真を撮ったことが認められる。近年のダウ関係の書籍に**図18**のような鳥居のある神社の写真が掲載されている。しかしこの写真の撮影時の1903年と日本の神社という説明があるものの場所は特定されていない。明治時代の写真（**図19**）や現在までの調査（**図20**）からすると、滝尾神社の最奥にある「子種石」をご神体とする鳥居の場所と思われるが、今後さらに調査を進めて確定したい。

以上のようにダウの日光滞在に関しても残された課題は幾つかあり、その後の彼の東京滞在に関してはさらに数多い。筆者が高校生の時に修学旅行で日光を観光したのは約半世紀前であった。その後、宇都宮に住居を構えて37年、現在は日光線沿線の「鶴田駅」付近に住んでいる。この駅は、宇都宮駅を始発として最初に停車する第１の駅で、1902（明治35）年13日に開業している。戦前の建築と思われる平屋の駅舎を改築して使用し続けているが、上りと下りのホームを繋ぐ陸橋がある。その陸橋の柱には「明治四十四年鐵道院」と「浦賀舩渠株式會社製造」の銘が刻まれた船のマストが支柱として使用され、現在の陸橋は平成20年度に「近代化産業遺産」に経済産業省によって指定されている。ダウが通過した頃の明治36年にはこの陸橋はなかったと思われるが、それでも、一世紀以上も前に彼が往復した沿線に居るということは、予期していないこととは言え、奇遇という他はない。他の人より数多く日光を訪れてはいるが、次の調査のために訪れる時には、本稿のダウの視点から改めて日光山内を見直し、残された日光滞在に関する研究に役立てたい。

図18. “Japanese Shrine and Creek” J. L Enyeart, *Harmony of Reflected Light: The Photographs of Arthur Wesley Dow*. Santa Fe, New Mexico: Museum of New Mexico Press, 2001, p.70

図19.「子種石」絵葉書　中川光熹／石井敏雄『絵葉書に見る郷愁の日光』随想舎　1995年　69頁

図20.「子種石」筆者撮影　2012年6月30日

謝辞

下記の各機関に感謝致します。

・「幕末・明治期日本古写真メタデータベース」を所蔵する長崎大学付属図書館
・本稿で掲載した日光市の地図を所蔵する日光市立図書館
・明治時代の和書をネット上で公開している国会図書館「近代デジタルライブラリー：http://kindai.ndl.go.jp/」（現国会図書館デジタルコレクション：http://dl.ndl.go.jp/）
・日本鉄道株式会社「列車運轉時刻表」（明治三六年七月改正）を所蔵する日本交通公社「旅の図書館」
・ダウ関係のマイクロフィルムを2008年からオンライン上で公開している「アメリカ美術の古文書館」（Archives of American Art）
・洋書をオンライン上で公開している「Internet Archive Search」

註

1 加藤 絢「写真とジャポニスム―絵画主義（ピクトリアリズム）からの展開」世田谷美術館編集『ボストン美術館展　華麗なるジャポニスムス展』NHK　2014年　176頁。このカタログには、ヘレン・バーナムとジェーン・E.ブラウンによる「イントロダクション：魅惑する日本」におけるダウへの言及（11頁、15～16頁）があり、他にも３カ所（149頁、169頁、185頁）でダウについて記述されている。ボストン美術館所蔵の「Album of Dow Photographs」には264枚の写真があり、その中には日本滞在中に撮影されたと思われる写真が多数ある。これらの写真はネットで公開されている（http://www.mfa.org/search?search_api_views_fulltext=Album%20of%20Dow%20Photographs）。

2 例えば、Spanierman Gallery, *Arthur Wesley Dow (1857-1922): His Art and His Influence*, New York: Spanierman Gallery, LLC, 1999. N. E. Green & J. Poesch, *Arthur Wesley Dow and American Arts & Crafts*. New York: The American Federation of the Arts, 1999. J. L Enyeart, *Harmony of Reflected Light: The Photographs of Arthur Wesley Dow*. Santa Fe, New Mexico: Museum of New Mexico Press, 2001. T. Fairbrother, *Ipswhich Days: Arthur Wesley Dow and His Hometown*, New Haven, Connecticut: Yale University Press, 2007　などのダウの展覧会カタログを参照。さらに「アメリカ美術の古文書館」（Archives of American Art）収蔵のダウ関係のマイクロフィルムが2008年からオンライン上で公開されている（http://www.aaa.si.edu/collectionline/dowarth/）。

3 岡崎昭夫「ダウの美術教育への貢献と日本における調査旅行の日程」宇都宮大学教育学部紀要　第45号　第１部　1995年　153～170頁

4 アメリカのスミソニアン研究所のマイクロフィルム・コレクション『Archives of American Art』の「リールNo. 1209」に収録されている西周りの世界一周の第一冊目の日記（1903年９月５日から12月４日まで）。A. W. Dow, 1st Notebook, Ipswich to Daitokuji, Kyoto. In *Arthur and Dana Dow Papers*, Archives of American Art (Reel No. 1209). Washington D. C.: Smithsonian Institution, 1903 (http://www.aaa.si.edu/collectionsonline/dowarth/container196363.htm).

5 岡崎昭夫「ダウ（Arthur Dow）の京都滞在（Ⅰ）―1903（明治36）年11月28日～12月４日まで―」芸術研究報　第22号　2002年　61～95頁

6 岡崎昭夫「ダウ（Arthur Dow）の京都滞在（Ⅱ）―1903（明治36）年12月５日～12月23日まで―」芸術研究報　第25号　2005年　１～18頁

7 岡崎昭夫「ダウ（Arthur Dow）の滞日日記―太平洋航路と横浜入港―」芸術研究報　第31号　2011年　９～22頁

8 D. F. Dow, Dana Dow Travel Diary, 1904-1904. In *Arthur and Dana Dow Papers*, Archives of American Art (Reel No. 1209). Washington D. C.: Smithsonian Institution, 1903. (http://www.aaa.si.edu/collectionsonline/dowarth/container196364.htm).

9 井口丑二『世界一周実記』経済雑誌社　1904年

10 岡崎昭夫「ダウ（Arthur Dow）の滞日日記―横浜観光―」芸術研究報　第32号　2012年　１～14頁

11 横浜新報社著作部編『横浜繁昌記』横浜新報社　1903年　403頁

12 「全国鉄道氣車発着時刻並賃金表」土谷鋼太郎『全国鉄道氣車便覧』天正堂　1894年

13 日本鉄道株式会社「列車運轉時刻表」（明治三六年七月改正）　なお、宮脇俊三編『時刻表でたどる鉄道史』JTB　1998年　参照

14 「今昔マップ on the web」埼玉大学教育学部　谷 謙二（人文地理学研究室）作成（http://ktgis.net/kjmapw/index.html）

15 桜井純一編「宇都宮停車場」『日本鐵道線路案内記』博文館　1902年　158頁

16 『街の達人　栃木便利情報地図』昭文社　2016年　55、86、90、95、96頁

17 B. H. Chamberlain and W. B. Mason, *A Handbook for Travellers in Japan*, 7th ed., London: J. Murray, Yokohama, Kelly & Walsh, 1903, p.194

18 桜井純一編「日光停車場」535頁

19 佐藤一誠『日光』世界交通社　1902年　52頁

20 B. H. Chamberlain and W. B. Mason, p.194

21 日光市史編さん委員会『日光市史』（下巻）日光市　1974年　139～140頁

22 同書　463～464頁

23 富田昭次『ホテルと日本近代』青弓社　2003年　124頁

24 「駅から２キロ先」の「日光ホテルは、日光市郊外の渓谷のなか、境内の森近くにあり、すばらしい接待をもって迎え入れてくれた。」フレンツ・フェルナンド『オーストリア皇太子の日本日記』安藤 勉訳　講談社学術文庫　2005年　190頁

25 瀬川光一編『日本之名勝』史伝編纂所　1901年　21頁

26 藤野彦次郎『日本漫遊要覧』（上の巻）東京画報社　1899年　117頁

27 （社）日光観光協会編『日光パーフェクトガイド』下野新聞社　2009年　26～27頁

28 『日光市史』（下巻）404頁、なおこの台風の規模や進行、日光への被害の詳細は第七章第四節「明治三十五年の風水害」385～408頁に記載されている。

29 B. H. Chamberlain and W. B. Mason, p.197, p.203

30 佐藤一誠　52頁

31 秦虎四郎『日光山名所旧跡案内』盛弘堂　1901年　９頁

32 B. H. Chamberlain and W. B. Mason, p.197, pp.197-198

33 フレンツ・フェルナンド　193頁～194頁

34 （社）日光観光協会編　78～79頁

35 鬼平金四郎『日光山小誌』開進社　1900年　10頁

36 （社）日光観光協会編　51頁

37 桜井純一編「日光停車場」539頁

38 「世界遺産：日光の社寺」日光東照宮陽明門MENU「陽明門」http://www.mct.gr.jp/world_h/toushogu/youmeimon_hashira.shtml

39 B. H. Chamberlain and W. B. Mason, p.199

40 ブルーガイド編集部『日光・戦場ヶ原・奥鬼怒』実業之日本社　2010年　32頁

41 秦虎四郎　17頁

42 同書　18頁

43 「世界遺産：日光の社寺」「本殿」http://www.mct.gr.jp/world_h/toushogu/honden_index.shtml

44 「世界遺産：日光の社寺」日光東照宮東西回廊目MENU「薔薇」http://www.mct.gr.jp/world_h/toushogu/touzai_kairou/bara.shtml

45 「世界遺産：日光の社寺」日光東照宮東西回廊目MENU「牡丹」http://www.mct.gr.jp/world_h/toushogu/touzai_kairou/botan.shtml

46 B. H. Chamberlain and W. B. Mason, p.200

47 佐藤一誠　15頁

48 ブルーガイド編集部　32頁

49 日光山輪王寺公式ホームページ「大猷院」http://rinnoji.or.jp/precincts/taiyuin

50　鬼平金四郎　19頁
51　牧 駿次編『日光の栞』三生舎　1909年　16頁
52　ブルーガイド編集部　39頁
53　高橋東太郎編集兼発行『日光山名所旧跡案内』1902年
54　佐藤一誠　25頁
55　B. H. Chamberlain and W. B. Mason, p.197, p.203
56　遅塚麗水（金太郎）『日本名勝記』（上巻）春陽堂　1898年　178頁
57　牧 駿次編　17頁
58　（社）日光観光協会編　112頁
59　ブルーガイド編集部　39頁
60　牧 駿次編　12頁
61　イザベラ・バード『イザベラ・バードの日本紀行』（上）時岡敬子訳　講談社　2008年　156頁（Isabella L. Bird, *Unbeaten Tracks in Japan*, Vol. I, New York: G. P. Putnam's Sons, 1881, p.120）

表1. ダウ（A.W. Dow）の日記の日光滞在の原文（筆記体の書き起こし）
（注記：表1の本文中の網掛け部分は判読が困難であった単語やスペルである。）

Saturday Oct 10
We take the 9.40 train for Nikko—change three times. It was a ride of 9 hours –the day was gray and dark though it did not rain. The landscape was somewhat depressing—just rice fields, rows of trees and groups of thatched roofs. The land is highly cultivated and the patches of vegetables and grains made spots of bright color. At each station a man come along crying "O bento" in a minor singing—he has cakes fruit, lunch boxes and drinks. In the afternoon we began to see distant mountains—the most striking one was Mt. Tsukuba of symmetrical tone. At Utsunomiya, where we made our last change, the great avenue of cryptomeria begins, leading to Nikko, twenty miles or so. It was dark, but we could see the long dark line of sombre trees. The Japanese people that we saw on the way seemed mostly of the peasant class, rather rough looking everybody was busy though not hurrying. The train moved slowly, with long waits at stations. At Hachi ishi the last station we were put into jinrikishas by the Nikko Hotel man who had met us at Imaichi—then we had a strange experience that we are not likely to forget. The two men rushed the jinrikisha up a long street of shops (fewer shops than Yokohama and a different clan of people) then we were met by other men—three to each jinrikisha, and we entered avenues of cryptomeria whose giant trunks towered up into the darkness—the men pushed us up over bumping steps, the head man uttering a cry of warning at each "jounces" –they whisked us around corners and along lanes—there was a sound of making matter but the electric lights here and there only made the darkness more mysterious. We go down a hill, over a bridge spanning a torrent—then more great trees and lanes, and finally into the yard of the bright by lighted hotel with great flourish of speed. We have comfortable rooms—the rates are 5 yen for one or 9.50 for two in a room.
Sunday Oct 11
Looking out of our room this morning we can see light green mountains, very steep, just a cross the river (the Daiyagawa). There is a village here with streets at right angles. Brooks come rushing down and run along the streets and through gardens – some of these turn with wheels. The wilds are much like those of Pont Aven. Nearly every house has the garden – not a flower garden, and a little space of trees, shrubs, a lantern or two, rock work and a pond or imitation of one. The great typhoon of a year ago made awful damage – destroyed the famous red bridge and swept away more than 40 of those old statues called the "Hundred Gods." It changed the banks for miles. We visited the temples – the fee is 80 sen (three temples) each person and 1.25 yen for 5 people to the guide, beside little fees for the museum, "the three Buddhas," and the sacred dance. The temples are overpowering in their richness and barbaric splendor, but a decadent art. I was interested and stunned but not inspired. The lovely avenues of great trees and the bright of steps leading up to the towns were more impressive in their severity and grandeur than were the temples.
Monday Oct 12
It rained this morning but this afternoon cleared away and I went to walk with Mr. Woodman, the son of a missionary of the P. E. Church. His father is from Newburyport, and we made the acquaintance through Mr. Louis Jones my former schoolmate. We went 3 miles to Urami Cascade. Urami means "back view" because formerly one could go behind it, but the typhoon changed it very much. However the landscape was delightful. A deep gorge bordered by overlaying maples and pines, a torrent, and high mountains – so much like Soga Shubun and Sesshu ! The narrow footway with rustic rails and bridges winds along the steeps side of the gorge. At the way up we see the mountains – one Nyohosan has a crater, but it is evident that the whole regions is volcanic – the mountains on the other side of the Daiyagawa seem like crater walls reminding one of "the Punch bowl" at Honolulu.
Tuesday Oct 13
This morning Minnie, Dana and I went up to the little temple of Takino-o. We followed pine avenues up the mountain, and along mossy paved paths. There are little bridges over rushing brooks, and here and there a shrine. Everything is green with mass and deep in the shade of giant cryptomerias. The Torri at Takino-o are beautiful in color. There is an enclosure behind the temple fenced in with a fine stone railing. The stone gates are hanging outward and the whole place seems deserted and out of repair. There are three sacred cryptomerias in this enclosure. The old priest brought us up tea and cakes, and was very kind and pleasant. Minnie and I sketched, while Dana made plans and drawings here with a little torii in front of it. This afternoon we have all been to Urami cascade.
Wednesday Oct 14
A rainy day spent in visiting shops and taking short walks. Prints by Hiroshige and Kunisada and Yeisen can be bought from 15 sen to 75 sen. I bought a small Buddhist kakemonos for 1.25 yen and brush holders for about 60 sen. Little knife handless 30 to 60sen. Sword guards with good designs and usually 1 to 3 yen. We lunched with Mrs. Woodman and her daughter.
Thursday Oct 15
Excursion to Lake Chuzenji – Dana, Dr. H. and Stuart walked while M. and I took Jinrikishas. Fine day, blue sky, sunshine – the mists rolled away from the mountains showing the colors –the yellow greens, deep blue greens, yellows, reds, and browns. For several miles we followed the Daiyagawa– the nets on both sides in view. The road winds along under cliffs and across chasms. At Umagaeshi Hotel I saw two nice ink paintings as a cupboard door, also a fine iron vase with

this decoration. From here the road goes up by zigzags to the height of Lake. Chuzenji more than 4000 ft. above the sea. Foot. At intervals there are tea houses – always there is some fine view. Few Japanese artists in "Kago" stopped to sketch. I noticed that they used a soft pencil held side case and made very rapid bunjinga-like sketches. The greatest sight was the waterfall Kegon-no-taki 250ft. high. We viewed it from a little tea house as a frightful precipice. The water becomes white spray lacey before it reaches the pool. The stream is the outlet of the Lake. From here we pass through a beach port I suddenly saw something shining through the trees and thing at I was looking at the sky from a precipice. Then I suddenly realized that it was the Lake! It is like Lake Louise – boarded by mountains. Nantai is a symmetrical, heavily wooded mountain, rising to be great height. The Lake is shining realm and mirror like with the blue nets reflected. A great landside has come down Nantai, destroying part of a temple. We had a guide ride home despite considerable walking. There is very greened scenery among these mountains, and fine color. The Japanese enjoy it all – they go seemingly and in companies, men, women merchants, priests, school boys and soldiers.

Friday Oct 16

Photographing and sketching and shopping with Mrs. Woodman wife of Rev. Mr. Woodman. We have a distinguished guest here tonight Sir David Evans, Governor of Hong Kong.

Sat. Oct 17

Rain in a.m. Afternoon spent in sketching and visiting shops. The tea houses have well kept gardens. The rooms are immaculate – the fusuma decorated with ink paintings– there are also very great Kakemonos. (I spent a.m.in the temples.)

Sunday Oct 18

A fine day with cloudless sky. We went to temples in morning. Iyeyasu's is the most important. There were many pieces of fine designs, notably the pillars of the Yomeimon and the inlaid work of the Karamon. The best color is in the ceiling of the prince's room in Iyeyasuu's temple. In general the colored sculpture interested me very much. The botan and another flowers often had a gold setting and the use of white with colors is very effective. Especially on the Karamon where there are whole procession of white figures. The court of lanterns at Iyemitsu's temple is very coved. Each lantern has a coating of thick green moss on its roof. Iyemitusu's temple is Buddhist and is very elaborately decorated in gold and color. The great wall paintings of shishi are cruder and coarser than those in Iyeyasu's temple. In p.m. I worked down to the village to see the cryptomeria avenue that leading from Utsunomiya to Nikko. It has been cut away to make room for horses and there was much of short town along outside where tree av. was intact. The railroad has crossed it. Still it is very impressive, yet riding along for 10 miles and north. I visited the great pine that I leave in my sides. It is on the side by a very step hill and there are other pines near, but not as fine. The view is superb, the great mountains being in full sight. Even Nantaizan showed its corner, the bed of the Daiyagawa with its bluish pebbles was conspicuous beyond the living line of gray village roofs, I sow the old pine, a friendly greeting, and took several photos of it. Near is a hill shrine on the top of the hill, and a small grave of very tall trees.

Monday Oct. 19

We take the 8.54 trains for Tokio- fare 2.07 yen 2nd class, but we had to pay 1.76 excuse baggage. Our bill at the Nikko Hotel for nine days has one tiffin (three people) 128 yen. This included washing, and jinrikisha fares to station. We arrive at Uyeno, leave our baggage at station and take jinrikishas for the Hotel Metrople.

Summary

Arthur Wesley Dow Travel Diary in Japan

Touring Shrines and Temple in Nikko

OKAZAKI Akio

Researchers concerned with the historical development of American art education cannot help but acknowledge Arthur Wesley Dow's significant contribution to the field. Although many writers have recognized him as one of greatest figures in art education, it was not until the end of the twentieth century that art historians discovered his impact on the early development of modernist art. Dow is one of the few Americans whose work in the field of art and art education was influenced by Japanese traditional art.

In his book (1934), Johnson was able to take full advantage of using all six notebooks of Dow Travel Diary in making accurate description of Dow's round-the-world journey. Unfortunately, only the first notebook survives. The handwritten manuscript is inscribed "1st Notebook, Ipswich to Daitokuji, Kyoto, Trip around the world, 1903, westward," and is date between September 5 and December 4. He came to Japan in October 1903 and spent three months in Japan, including two days in Yokohama, a week in Nikko, six weeks in Tokyo and a month in Kyoto.

According to the first notebook of Dow and his brother Dana's diary, Dow, his wife Minnie, Dana, and two friends departed from San Francisco on September 19, 1903, and arrived in Yokohama, Japan on October 7. During his stay in Yokohama, Dow had three good scenic spots for the general view of the town and harbor.

This paper provides the definitive description and detailed account of Dow's itinerary between October 10 and 19. It explores Dow's visits on Nikko Shrine and Rinnoji Temple during his stay in Nikko. It concludes that while he finds the effective design of colored sculpture (peony and another flowers), he was impressed by the severity and grandeur in the avenues of great trees between shrine and temple.